

個性化教育の成果

——卒業生の追跡調査より——

田 中 節 雄

On the Effects of the Education for Individuality
——Some Results of the Research of Graduates——

Setsuo TANAKA

はじめに

1. 課 題

1987年に最終答申が出された臨時教育審議会の議論のなかで盛んに主張された学校教育の「個性化」「自由化」は、1994年の現在ではすっかり教育関係者の間では常識のようになってしまった。「個性化」に反対する教育関係者はいないと言っても過言ではないほどだ。しかし、一方、では実際の日本の教育がこの7,8年の間に「個性化」「自由化」してきたのかと言えば、それはかなり疑問と言わざるをえない。また、教育の「個性化」とはそもそもどのようなものなのか、また「個性化」された教育によってどのような能力・態度・価値観が形成されるのか、そうしたことはほとんど分かっていない。

本稿の課題は臨時教育審議会で議論される10年も前から「個性化教育」を目指して活動を行ってきた小学校を事例として「個性化教育」についてその一側面を明かにすることである。具体的には小学校の卒業生を対象とした調査によって「個性化教育」の成果を検討してみることである。

対象とした小学校の教育に関しては学校の教師集団が自らその目的や実践の内容をいくつかの著書として著しているが、そのような教育を受けた子どもたちが結果としてどのような能力・態度・価値観等を形成したのかについてはわずかな研究しかなされていない。現在高校生、大学生、社会人となっている卒業生に関する研究は皆無である。教育の目的や実践の分析はもちろん必要であり、さらに研究されるべきであるが、教育の結果の分析もさらになされなければならないと思われる。筆者はそのような問題関心から1992年に卒業生を対象とした調査を実施した。本稿はその調査結果の分析を中心としている。

2. データの説明

本稿で利用しているデータの中心的部分は卒業生を対象とした調査（以下「卒業生調査」と呼ぶ）であるが、それ以外にも、5名の卒業生への聞き取りと校長、教頭、その他の教師からの聞き取りの結果も分析に活用している¹⁾。

卒業生調査の概要は以下の通りである。

- 1) 調査対象：愛知県の公立〇小学校を1980年3月から1992年3月までに卒業した者全員
- 2) 調査実施時期：1992年9月～11月
- 3) 調査方法：対象者全員に調査票を郵送，郵便にて回収
- 4) 調査対象者数（年次別性別卒業生数）：

卒業年	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	計
男 子	94	73	66	81	95	85	102	86	68	55	49	67	51	972
女 子	82	60	73	87	68	88	72	92	59	70	60	61	60	932
計	176	133	139	168	163	173	174	178	127	125	109	128	111	1904
回収数	34	25	32	35	35	46	41	70	39	53	62	51	57	580

- 5) 回収結果：男子/251，女子/329；計/580
回収率：30.5%

第1節 〇小学校の教育の概要

〇小学校の「個性化教育」の歴史を簡単に振り返ってみよう。〇町では、1977年頃老朽化した校舎の改築を期に当時の町長が「オープンスペース」のある学校を作ろうと計画し、町議会での対立などもあったが結局計画は実施されることとなった。1978年9月に新校舎で授業開始。間もなく、建物施設をオープンにするだけでなく教育内容を「個性化」することが教師の間で主張されるようになった。その結果、79年に「はげみ学習」と「オープントイム」が導入され、ここに現在の「個性化教育」に至る第一歩が記されることとなった。

その後、以下のように次々と新しい試みが導入されていった。

- 79年：フェスティバル
- 80年：週間プログラム，ブロック制
- 81年：総合科目「生きる」
- 84年：独立国
- 85年：トピック
- 86年：芸術祭

次に現在のカリキュラムについて簡単に触れておきたい。

1988年度の6年生の時間割は次頁の表のようになっている。

〇小学校は現在、1時間25分を1単位（「ブロック」と呼ぶ）とするブロック制をとっている。1週間17ブロックのうちで、普通の学校で行われているような「一斉授業」形態の授業は6ブロックある。授業時間数で見ると年標準時数のやく50%がこの形態でおこなわれている。従って、〇小学校の場合、「オープンスクール」「個性化教育」だからといって一般的な小学校の授業形態を全くとっていないというわけではない。しかし、それにしてもやはり、「一斉授業」形態でない〇小学校独特の授業形態がいくつもあり、そこに〇小学校が目指す教育のあり方がよく表れていることは確かである。

〇小学校独自の授業形態は、いずれも「一斉授業」という方法を出発点として、その中

個性化教育の成果

〈時間割表〉

	ブロック	月	火	水	木	金	土
8:30	ブランチタイム 朝のつどい はげみ学習ゾーン						
8:55	朝の観察 朝の観察・朝の会						
	第1	理科	週プロ	オープン	国語	体育	算数
10:20	ブロック	書き方	タイム				
10:50	フリータイム						
	第2	トピック	社会	週プロ	週プロ	はげみ	学年会
12:15	ブロック	道徳					
	ランチタイムゾーン						
1:25	第3	家庭	表現	清掃	表現	生きる	
	ブロック	自治					
2:50	帰りの会				帰りの会		
				クラブ			
	清掃			清掃			

に含まれている長所を拡大し、問題点を克服するためにはどうしたらいいかという問題意識から生み出されていったものであると筆者は判断している。また「フェスティバル」「独立国」などの集団活動については、既存の「学芸会」「生徒会」などを基本的出発点としながらも、ある意味では根本的に修正を施したものと言ってよい。カリキュラムや授業方法の詳細な分析と検討をしている余裕はないので、〇小学校独自の授業形態の特徴を簡単に結論的に示すと次のようになる。

a. 「一斉授業」形態から発展したもの：

- 1) 「はげみ学習」：個人の反復練習による単純で基礎的な知識・技能の習得
- 2) 「週間プログラム」：生徒自身の計画による学習（複数単元の目標・時数・標準的な学習の流れを明示された「学習のてびき」を配布され、自分のペースによって学習を展開する。）
- 3) 「トピック」：知の総合化、自己学習能力育成を目的とした個人による総合的学習（教科ごとに学んできたことがらを統合する。）
- 4) 「総合的学習」：知の総合化を目的とした集団による総合的学習（高学年では、いくつかの教科を総合し年間を通して一貫したテーマを追求する。）
- 5) 「オープントタイム」：個人による自由な能力開発活動（教科の枠を越え、全く自由な形で自由な学習をする）
- 6) 「総合表現活動」＝「表現」を重視した音楽や造形

b. 「特別活動」から発展したもの：

「フェスティバル」「独立国」「芸術祭」：

基本的には既存の学校の「学芸会」「生徒会」と同じものであるが、徹底的に生徒の主体性・自主性を尊重し、期待した活動となっている。すなわち、これらの集団的活動を実施する際に、教師は極力手を貸さず、子どもたち自身が企画し、見通しを立て、手持ちの知識を応用しながら行動し、協力しあうことを

〇小学校では目指す。そしてこれらの活動を通して子どもたちにいわば「生活者」としての力を身につけさせようとしている。

以上のまとめに〇小学校の教師自身の次のような言葉を補えば〇小学校が目指しているもののおよその姿が把握できるのではないだろうか。

「 $ab=ba$ と、頭から暗唱していることが、いったいどれだけ日常生活で役立つというのであろうか。そんなことより、冷蔵庫を開けて三種類の材料しか入っていなかった時、その材料を使って今晚のおかずをどのように作るかということの方が、生活の知恵としては重要だ。つまり、与えられた条件のなかでどう自力で課題解決していくかということが、多分、家庭生活だけでなく、社会人として生活していくうえで、より重要になってくるのではないか。…先ず自力でやってみるということがいままでの学校教育ではなさすぎたのだ。」(『個性化教育へのアプローチ』82頁)

「学校生活での主人公は子ども自身であるという考えのもとに、すべての活動を子どもたちに返すと同時にそれぞれの活動の狙いと方法を改めて見直すこと、これが私たちの集団活動の指導上の方法論となった。…朝礼や始業式、終業式などの儀式は廃止し、運営はすべて子ども主導に変え、運動会や遠足、修学旅行など学校行事も企画から準備、運営まで子どもたちの手に委ねた。」(『自己学習力の育成と評価』63頁)

〇小学校の教育が何を目指し、その教育活動はどのように性格付けられるべきかについては改めて主題的に検討する必要があるが、ここではとりあえず、次のように整理しておきたい。

- ①学習効率を高めるための学習者の個別化→「はげみ」
- ②教科で学んだ知の総合化→「トピック」「総合的学習」
- ③教科で学んだ知の生活への応用→「フェスティバル」「修学旅行」
- ④主体化（主体者としての能力の開発）→「週間プログラム」「オープンタイム」「フェスティバル」「修学旅行」「独立国」
- ⑤集団化（集団活動の喜びの経験、集団活動のための諸能力の開発）→「フェスティバル」「修学旅行」「独立国」

このようにまとめられた特徴を持った教育を行っている〇小学校の卒業生ははたしたどのような能力を身につけ態度・価値観を形成したのだろうか。

2. 調査結果の分析

卒業生調査の結果を分析し、「小学校卒業後の進路」「形成された人格」「緒川小学校に対する評価」の3つの面から緒川小学校の教育の成果を考察してみよう。

(1) 小学校卒業後の進路

学校教育の成果を測る尺度の一つとしてここでは「小学校卒業後の進路」を取り上げる。同じ〇小学校を卒業した子供たちはその後、どのような中学へ進学したのだろうか。また中学卒業後はどのように進路が分かれて行ったのだろうか。その進路の形成のしかたに何か特色はあるのだろうか。それとも多くの普通の小学校の場合と変わらないのだろうか。

とりわけ、高校進学率や大学進学率がどうなっているかを見てみる。一般に「オープンスクール」あるいは「個性化教育」の問題点として「学力の低さ」が懸念される²⁾。それが事実であるとするとも小学校の卒業生は高校進学率や大学進学率が全国平均や愛知県の平均よりも低くなっていることが予想されるがはたして実際はどうであろうか。

入学した中学と中学卒業後の進路は〈1〉のようになっている。

〈表1〉

入学中学の種別% (N=580)		中学卒業後進路	
地元公立中学	96.7	就職	1.7
地元外公立中学	0.7	高校	95.1
私立中学	2.1	専修学校	2.7
国立中学	0.3	その他	0.5
その他	0.2		

中学については、ほぼ全員が地元のH中学へ進学している。進学中学が地元集中していることはごく普通のことであり、特に言うべき事はない。中学卒業後は高校への進学者が95%である。1990年の高校進学率の全国平均は94.4%となっているから、O小学校の高校進学率はほぼ全国並である。

個性化教育に対する「低学力の懸念」は外部の人々にのみあるわけではない。O小学校の卒業生自身がそういう心配をし、また自身の経験に基づいてそのような発言をしている。例えば、アンケートには次のような記述が見られる。

中学に行くと、2つの小学校がいっしょになってやるけど、初めはあまりレベルはわからないが、少したつと、相手の小学校全員とO小の約半分は成績を競うが、あとの半分ぐらいが勉強のやり方がわからず、落ちぶれてしまう。私も落ちぶれた方で、個人でやる勉強なんて絶対だめです。(高3 女子)

全ての学校はみんなが競争しているのに、O小はそれがないため、中学校になって落ちこぼれが多い。…中学校ではM小といっしょになるが、実力にはっきり差が出ている。(中3 男子)

当事者のこのような証言にも関わらず、調査結果から判断する限り、中学校で「落ちこぼれる」生徒はO小学校卒業生に特に多いとは思えない。この点は、以下に見るように別のデータからも言える。

O小学校卒業生で高校へ進学したものに関して、その進学先の高校を入学難易度によって分類してみると〈表2〉のようになる。

入学高校レベルをみると、偏差値40～46の高校に2／3が進学している。一見O小学校卒業生の学力の低さを推定させるが、これは中学の進路指導で強く地元のH高校への進学を勧めるためである。中学での成績が抜群に良く名古屋市の進学高校に確実に入学できそうな生徒以外はH高校を受験させられた。このような「地元志向」の進路指導は必ずし

〈表2〉 ()内数字は愛知県業者テストによる偏差値³⁾

進学先高校の入学難易度別割合(N=389)	
1 (60以上)	10.8
2 (53~59)	9.3
3 (47~53)	8.2
4 (40~46)	65.0
5 (39以下)	6.7

もH中学に特有なことではない。東海地方の県では地元で高校が新設されると「地域の水準を上げる」ことを建前としてどこの中学でも地元高校への進学を生徒に半ば強制しているのである。

そうした進路指導のなかでも偏差値60以上の高校に進学したものが10%いることはO小学校卒業生の中学段階での学力が決して低くはないことを示しているのではないだろうか。

次に高校卒業後の進路について見てみよう。

〈表3〉

高校卒業後進路 (N=234)		大学の種別 (N=58)	
就職	24.8	私立	70.7
短期大学	23.1	公立	3.4
大学	33.3	国立	25.9
大学受験浪人	5.6		
専修学校	12.0		
その他	12.0		

大学短大への現役進学率が合計で56.4%になっている。1990年3月高校卒業者の大学短大現役進学率の全国平均が30.7%, 愛知県の平均が37.9%であるから, O小学校卒業生の進学率は非常に高い。

さらに進学した大学を設置者別にみると, 私立70%, 国公立30%である。全国平均でみると, 国公立大学への進学率は約25%であるから, O小学校卒業生の国公立大学への進学率は高い。細かくみれば多様であるが, 全体的には私立大学よりも国公立大学の方が入学難易度が高いと判断していいから, 結局O小学校卒業生は大学入学時点で全国平均以上の学力を身につけているということになる。

以上をまとめてみると, 同じ地域の他の小学校との厳密な比較はできないにしても, これまで示したデータからは, 高校受験, 大学受験という観点から言えばO小学校の卒業生は全国平均以上の学力を形成していると判断していいのではないだろうか。

もちろん高校入試やさらに大学入試における学力は, 直接的には小学校で形成された学力によるのではない。高校入試は中学での, 大学入試は高校での勉強の成果と考えるべきである。とりわけ大学入試は進学した高校の学力水準が少なからぬ影響を及ぼす。高校入学時に同じ学力を持った生徒であれば学力水準の高い高校へ進学しそこで学ぶ生徒の方が

より高い学力を身につけ易いであろう。

しかし、この点では〇小学校卒業生はいくらか不利な状況にある。2／3は偏差値40～50の高校で学んでいるのである。それにも関わらず国公立大学への進学率が30％であるということは、〇小学校で身につけた学力が間接的に効果を持っていると考えていいのではないだろうか⁴⁾。

(2)形成された人格

〇小学校の卒業生はその小学校教育によってどのような人格を形成したのだろうか。ここでは、形成された人格の側面として、

(1)現在の自分の行動様式・思考様式

(2)人間観・勉強観

を取り上げた。もちろん現在の行動様式・思考様式あるいは人間観・勉強観を形成したのは小学校教育だけではない。小学校の教育は卒業してから時間が経過するほどその人格への影響力を薄めていくだろう。そのような点に注意をはらいながら調査の結果を見ていこう。

1. 行動様式・思考様式

さまざまな行動様式・思考様式をあげて、現在の自分にそのような傾向があるかどうかを尋ねてみた。〈表4〉はその結果である。

〈表4〉 卒業生の現在の行動様式・思考様式

	強く ある	いくら かある	強く + いくらか	あまり全然 ない	全然 ない
目上の人から指図されても一応は自分で判断し納得してから行動しようとする	24.9	46.5	71.4	5.4	1.0
どんな人の意見でもきちんと聞こうとする	23.3	40.4	63.7	6.9	1.4
考えたり行動したりする前にあらかじめ見通しをたててから取り組む	18.0	41.8	59.8	13.3	4.0
人に頼らず自分で考えようとする	18.3	40.8	59.1	10.7	0.9
知らないことに積極的にチャレンジしようとする	17.8	37.5	55.3	12.1	2.4
一つの問題に取り組むときなるべくいろいろな見方をしようとする	14.7	37.0	51.7	12.8	2.8
本などで新しい知識を学ぶと、それを使って身の回りの実際の問題を考えてみようとする	16.4	34.5	50.9	13.1	4.8
誰に対しても自分の意見をはつきりと述べる	15.4	30.9	46.3	17.4	2.2
失敗を恐れないで行動する	11.1	25.9	37.0	19.2	2.4
クラス（職場）などで何かをするとき自分からアイデアを出す	9.8	26.6	36.4	22.1	7.9
なるべくまわりの人と同じことをしていきたい	5.2	22.1	27.3	26.8	11.1
先生（上司）が勉強（仕事）の仕方を指図してくれるのを期待している	4.1	16.6	20.7	31.4	16.9

目上の人の指図を鵜呑みにしないで自分なりに判断をしようとしたり、人に頼らずに自分で考えようとする「自律性」。行動する前にあらかじめ見通しを立てる「見通し能力」。またどんな人の意見でもきちんと聞こうとする「開かれた態度」。これらの態度・行動様式は〇小学校が非常に重視した教育目標であるが、その傾向があると答えたものは6割以上となっている。また、知らないことに積極的にチャレンジする「進取の態度」。一つの問題に取り組む際になるべく多様な見方をしようとする「視点の多様性」。さらに、本などで知識を学んだら実際に使ってみようとする「知の活用」。これらもやはり〇小学校がその教育活動の目標としてきたものであるが、過半数のものが「その傾向がある」と答えている。

逆に、なるべく周りの人と同じことをしたいと思う「集団への没主体的同調」。先生や上司が勉強や仕事の仕方を指示してくれるのを期待する「権威への依存性」。これらはともに〇小学校が子どもたちに望んでいないような行動様式・思考様式である。そしてこれらの傾向が「ある」と答えたものは30%未満であった。

これらの結果から、一応、〇小学校卒業生は〇小学校がその形成を目標としてきた行動様式・思考様式をかなりの程度身につけていると言っているのではないだろうか。他の普通の小学校卒業生の場合との比較はここではできないが、これらの「自律性」「見通し能力」「開かれた態度」あるいは「視点の多様性」「知の活用」などは一般に現在の学校教育のなかで不十分とされている行動様式・思考様式であるから、他の小学校卒業生の場合この調査結果の数値を大きく上回することは推測し難い。そうだとすれば、〇小学校の教育活動はその目標をかなりの程度実現したと判断するのが自然であろう。

2. ものの見方考え方

自分の行動の仕方とは別に、〇小学校卒業生は人間について勉強についてあるいはそれらに関わる物事について、どのような考え方をしているのだろうか。現在の教育にとって特に問題となるようないくつかの側面について尋ねた。

〈表5〉 現在の人間観・勉強観

	そう思う	思わない
友達と力を合わせて何かをすることは楽しいことだ	87.6	4.9
勉強することは楽しいことだ	23.3	29.6
人の前で失敗することはとても恥ずかしいことだ	52.6	27.9
競争がないと人間は成長しない	44.9	30.5
規則や強制がないと人間の生活は乱れてしまう	38.8	31.8

「友達と力を合わせて何かをすることは楽しいことだ」と思っているものは約90%にも上る。しかし、「勉強することは楽しいことだ」と思っているものは23%に過ぎない。これらは二つとも〇小学校がその教育の中心的な目標の一つとしてきたものである。

個性化教育というと生徒一人一人の個性を大切にすることから「はげみ学習」のように個別の学習が重視されることばかりが強調されやすい。たしかに個別の学習は非常に重視されているのではあるが、〇小学校ではそれと同時に、ある意味ではそれ以上に、

生徒たちの集団的活動も重視されているのである。「フェスティバル」「就学旅行」「独立国」などの集団的活動への力の入れ方を見ればそのことは理解できる。集団活動の重視といっても、しかし、それは一人一人の生徒に集団的な規律を教え込むことを目指しているわけではない。ましてや、集団の行動や思考を同一の形式のもとに置こうとするものではない。〇小学校の教育活動に見られる「集団活動の重視」とは生徒たちに「集団をつくりそこに参加することによって、一人一人孤立しているのとは違った能力が発揮でき、楽しさを体験することができる」ということを身をもって味わわせることである。その集団形成の過程では当然一定の規律を教えこむこともあるだろうが、決してそれ自体が集団的活動の目的なのではない。集団的活動の目的は、あくまでも個人の活動とは違った集団としても活動の楽しさを体験させ、それによって自らが集団的活動を主体的に担えるような能力と態度を養うことなのである。このような〇小学校にとって「友だちと力を合わせて何かをすることは楽しい」と思っているものが90%もいるという結果は嬉しいことだろう。

しかし、他方、「勉強することが楽しい」と答えたものがわずか23%というのはどのように理解するべきだろうか。〇小学校の場合もそうであるが、一般に「個性化教育」は子どもたちの個性を尊重しその興味関心を大切にすることを目指す、それはそもそもそうすることが子どもたちに勉強の楽しさを体験させ、そのことによって結果的に子どもたちの学力を向上させることになるからである。だとすれば、この数字は〇小学校が目指していたことが実現しなかったことを意味しているのだろうか。一応そう解釈しておくのが妥当だろう。もちろん、〇小学校では「勉強の楽しさ」を教えたにも関わらず、その後の中学や高校で勉強が楽しくなくなったと考えることはできる。おそらくその可能性は高い。しかし、ここではそこまでは主張しないでおきたい。少なくとも、〇小学校で勉強の楽しさを教えたとしても、中学や高校の経験がどうであれ勉強の楽しさが持続するほどには小学校の経験の力は強くなかったということである。

「人前での失敗は恥ずかしい」「競争がないと人間は成長しない」「規則や強制がないと人間の生活は乱れてしまう」などの考え方に賛成したものが反対したものより多いという結果も「勉強の楽しさ」の場合と同様のことが言えると思われる。これらの人間観は〇小学校が顕揚していたものとは違う。むしろ全く逆である。しかし、普通の学校生活の中では教師によって意図的にあるいは非意図的に子どもたちの内面に形成されていく人間観である。だから、〇小学校の建前とは別に実際にはその学校生活の中で子どもたちはこれらの人間観を形成していったと考えることもできるが、しかし、やはり、ここでは逆に〇小学校で形成した人間観が後の中学高校の学校生活のなかで崩され変形させられていったと考えておきたい。

(3)卒業生の〇小学校に対する評価

〇小学校が目指した教育は「個性尊重」の教育であったと言えるし、筆者の目からみてその実践は十分に生徒の個性を尊重しようとするものであったと思える。しかし、卒業生自身は〇小学校の教育についてまたその学校生活についてどのような感想を持っているのだろうか。今振り返ってみてどのように評価しているのだろうか。〇小学校の自己認識と大きくずれているようなことはたしてないのだろうか。

①学校生活の楽しさ

まず学校生活が卒業生にとって楽しいものであったかどうかを見てみよう。

1. 学校生活全般について

〈表6〉 学校へ通うことは楽しかったか

とても楽しかった	40.0
まあまあ楽しかった	47.8
どちらとも言えない	6.6
あまり楽しくなかった	4.1
少しも楽しくなかった	1.6

88%が楽しかったと答えている。一般に小学校生活が楽しかったと感じている人は中学や高校と比べると非常に多い。日本青少年研究所が実施した全国的な調査によれば87%（1983年）となっている。（『日本の小学生 国際比較でみる』57頁）従ってこの数字は〇小学校の学校生活が平均以上に際だって楽しいということを表しているわけではない。しかし、それにしても88%という割合は高い。特に、40%の卒業生が「とても楽しかった」と答えている。これらの数字は〇小学校の学校生活が全体としては子どもたちにとって居心地のよい快適なものであったことを示していると考えられる。

2. 個々の授業・学校行事について

それでは一つ一つの授業や学校行事についてはどうだろうか。

〈表7〉 授業・行事の楽しさ

	とても 楽しかった	まあまあ 楽しかった	どちらとも 言えない	あまり 楽しく なかった	全然 楽しく なかった
フェスティバル	69.3	21.0	6.6	1.4	1.7
オープンタイム	61.6	26.6	8.3	3.1	0.5
修学旅行	67.1	24.3	5.5	2.2	0.9
林間学校	58.6	29.3	6.9	3.8	1.4
音楽祭・芸術祭	41.0	27.2	21.6	6.3	3.9
独立国自治活動	25.8	27.9	28.9	11.0	6.4
総合的学習	19.8	25.7	32.3	14.7	7.5
週間プログラム	18.5	41.9	24.2	11.0	4.4
トピック	18.0	29.5	30.0	15.0	7.2
はげみ学習	14.5	32.6	29.3	16.7	6.9
教科の一斉授業	6.0	26.9	43.3	18.3	5.5

フェスティバル、修学旅行、林間学校は約90%の卒業生が楽しかったと答えている。これらの行事は普通の小学校でも多くの生徒が楽しい経験として記憶に残しているものだろう。

うから取り立てて言うべきことはない。

〇小学校独自の授業形態について見てみよう。「オープンタイム」が楽しかったと答えたものは88%となっている。それに対して「総合的学習」は46%、「週間プログラム」は60%、「トピック」は48%、「はげみ学習」は47%のものが楽しかったと答えている。

授業の楽しさの内容がはっきりしなければきめ細かな解釈はできないが、「楽しい」かどうかはその授業の全体的な評価を表していると言うことはできよう。だとすれば、「オープンタイム」の評価は非常に高いということになる。ただし、だからと言って直ちに「オープンタイム」という授業形態は学習形態として優れているという結論を下すことは危険である。「楽しい」という回答率がフェスティバルなどの集团的活動への回答と近く、他の学習形態とははっきり差があることから考えると、「オープンタイム」への評価はその活動が「勉強」らしくないためかもしれない。オープンタイムと同じように生徒の自主性や興味関心を活かしたものでも、「勉強」としての性格が強い「週間プログラム」や「トピック」あるいは「はげみ学習」はそれほど「楽しい」ものとは受け取られていないことからそう推測できる。

だが他方、「オープンタイム」が単に好き勝手なことができるから子どもたちは楽しかったのだ、と決めつけることもできない。そこには何らかの知的な活動があり、知的な充実感と満足感があつたと考えるべきではないだろうか。その知的充実感・満足感が「楽しい」という感想の一定の部分を占めていると筆者には思われる。「オープンタイム」ほどではないにしても「週間プログラム」「トピック」「はげみ学習」など〇小学校独自の授業形態に対して卒業生の「楽しさ」の評価は高い。「一斉授業」が楽しいと答えた割合が33%であることと比べるとその差ははっきりしている。しかも「一斉授業」は「とても楽しい」がわずかに6%である。しかし、ここからただちに「一斉授業」は劣った授業形態であるという結論を出すことはやはり軽率である。一人（あるいは二人）の教師が多数の生徒を同時に相手にして講義説明をするというこの授業形態にそれなりの有効性があることは〇小学校の教師も認めているところだ。そのことをきちんと押さえておいたうえで、改めて、「一斉授業」形態は子どもたちにとっては楽しさに欠ける授業形態となりやすい、と言うことはできるのではないだろうか。

②学校生活のどんなことが今役だっているか

次に、卒業生の〇小学校への評価を別の面から測ってみよう。「フェスティバル」を初めとして「オープンタイム」「週間プログラム」その他の授業で学んだこと身につけたことが、卒業後何らかの形で役に立っているのだろうか。卒業生自身がその点についてどう考えているかを探ってみた。

この表を見ると、子どもたちが〇小学校の目指すところをそれなりに的確に把握して、評価すべき点を評価していることが分かる。

「フェスティバル」で学んだことが役だっていると答えたものが最も多く54%となっている。次が「オープンタイム」で52%、そして次が「はげみ学習」の47%である。「フェスティバル」「オープンタイム」は楽しい授業として評価が高かったが、それだけでなく、そこで学んだこと身につけたことが今の自分に役立っていると彼らは考えているのである。これらの学校の活動に対する評価の基準は単に「楽しさ」だけでなく、「学んだ何か、

〈表8〉 学校で学んだことは役に立っているか

	とても + まあまあ	とても 役だつて いる	まあまあ 役だつて いる	どちらとも 言えない	あまり 役だつて いない	全然 役だつて いない
フェスティバル	53.7	27.1	26.6	34.7	6.0	5.7
オープンタイム	51.9	21.6	30.3	30.7	12.1	5.3
はげみ学習	46.7	12.6	34.1	36.2	11.0	6.0
林間学校	45.8	15.2	30.6	42.0	8.8	3.5
修学旅行	45.2	16.9	28.3	44.8	7.4	2.6
独立国自治活動	44.6	16.8	27.8	37.2	9.4	8.7
音楽祭・芸術祭	44.2	17.3	26.9	39.8	11.1	5.0
総合的学習	42.9	18.0	24.9	38.7	12.5	5.9
週間プログラム	39.7	9.8	29.9	38.2	14.2	7.9
トピック	38.3	11.2	27.1	46.0	10.2	5.5
教科の一斉授業	38.3	11.2	27.1	46.0	10.2	5.5

身につけた何か」でもあったのだ。

そのような評価基準は他の授業形態に対する答えにも表れている。例えば「はげみ学習」が「楽しかった」と答えたものは47%で、「役に立った」と答えたのは同じく47%である。「教科の一斉授業」は「楽しかった」が33%で「役に立った」が38%である。「オープンタイム」や「フェスティバル」が「役に立つ」度合で「楽しさ」の場合よりも評価を下げていることと比較すると、こちらは相対的には「役に立つ」度合の評価を上げている。結局子どもたちは「楽しさ」という尺度とは一応別に「役立ち度」という尺度も持っているのである。

③小学校の生活のなかで身につけた態度や習慣

先に〇小学校が子どもたちに身につけさせようとしている態度や習慣について現在卒業生が身につけているかどうかを確かめてみた。それでは卒業生自身はそれらの態度や習慣を〇小学校の学校生活の中で身につけたと思っているのだろうか。

「友達と協力することの楽しさを学んだ」と答えたものが実に72%にも上っている。先にも述べたように、これは〇小学校の教育の特徴をよく示している。〇小学校が目指している「個性化教育」は決して個人個人がバラバラに自分の固有の能力を伸ばしていくことではない。個人が自分の個性を活かすことは大いに尊重されている。その結果目上の人の指示を鵜呑みにせず、集団に没主体的に同調することも少ない「自律性」を〇小学校卒業生は持っている。しかし、その自律性は決して友達との関係を壊したりそこから逃避したりすることになるような排他的な孤立志向とは全く無縁のものである。逆に先にも見たように友だちと力を合わせて何かをすることは楽しいと感じているものが90%もいる。このように〇小学校の「個性化教育」とは子どもたち一人一人の「個性」や「自由」を最大限尊重しながらも、同時に、子どもたち同士の関係を豊かにし、集団としての力を育むという個と集団の相乗的な関係を目指したものである。

個性化教育の成果

〈表 9〉 小学校の学校生活で学んでこと（複数選択）

友達と力を併せて何かをすることの楽しさ	71.9
分からないことは自分でいろいろ調べる習慣	46.9
人に頼らず自分で考えようとする態度	41.4
知らないことに積極的にチャレンジしようとする態度	38.3
勉強して分かるようになることのおもしろさ	37.1
どんな人の意見でもきちんと聞こうとする態度	36.4
目上の人から指図されても一応は自分で判断し納得してから 行動しようとする態度	28.1
考えたり行動したりする前にあらかじめ見通しをたててから 取り組む習慣	26.4
本などで新しい知識を学ぶと、それを使って身の回りの実際 の問題を考えてみようとする習慣	25.7
クラス（職場）などで何かをするとき自分からアイデアを出 そうとする姿勢	24.1
誰に対しても自分の意見をはっきりと述べる態度	22.9
一つの問題に取り組むときなるべくいろいろな見方をしよう とする習慣	22.2
失敗を恐れないで行動しようとする姿勢	22.1

〈表 9〉を見る限り、卒業生が〇小学校から学んだ最大のものは「友達と協力することの楽しさ」である。この結果からは、やはり〇小学校の教育が十分な成果を生んだと判断していいのではないか。

次に、「分からないことを自分で調べる習慣」が47%、「人に頼らず自分で考えようとする態度」が41%となっている。「友達と協力する楽しさ」と比べると少ないが、それでもこの数字は小学校の学校生活に対する高い評価と言えるのではないか。「自学」もまた〇小学校が目指している教育の大きな目標であるが、この結果の数字はそれがかなりの成果をあげたことを示していると私は判断したい。

3. おわりに

本論文では、〇小学校の「個性化教育」がどのようなものであるのかを、その卒業生の進路や人格形成に焦点をあてながら明かにしようとしてきた。

結論的に言えば、〇小学校が探究し精力を傾けてきた教育活動は相当程度成果をあげているのではないかと筆者は判断している。学校を楽しみ空間として経験すること。子供たちに自由を与えること。子供の主体性を信頼しそれを育もうとすること。自ら学んで行く姿勢と能力を与えること。等など。〇小学校が目指してきたこれらの教育目標は調査結果から見る限りかなり実現している。

しかし、もちろんこれで〇小学校の教育の成果が十分に検証されたわけではない。個性化教育を行っていない普通の小学校との比較研究がなされる必要があるし、また〇小学校卒業生の追跡調査研究もさらに深められる必要がある。これらのことは筆者の今後の課題

としたいと考えている。

註

- 1) この卒業生調査の詳細な報告は本稿とは別に発表する予定である。
- 2) O小学校の実践報告と言える『個性化教育のすすめ方』の中でも「一般に個性化教育は学力格差を広げると信じられている」と述べている。
- 3) 資料は『90春愛知県公立・私立高校入試の手引』コバル出版、1989より作成。
- 4) O小学校で身につけた「学力」を高校進学や大学進学の水準を基準にして測ることは実は筆者にとって本意ではない。O小学校が目指している「学力」は受験の学力に置き換えられるものではないはずだからである。しかし、世間の個性化教育への批判に対する答えにはそれなりにになっていると思われるのであえて検討してみた。

参 考 文 献

- 1) 『個性化教育10周年記念誌 個性化の軌跡』緒川小学校、1988
- 2) 『個性化教育のすすめ方』緒川小学校、明治図書、1987
- 3) 『学びつづける生活のある学校をめざして』緒川小学校研究紀要'90、1990
- 4) 『個別化・個性化実践に学ぶ』加藤幸次、明治図書、1985
- 5) 『個別化・個性化教育の理論』加藤幸次、黎明書房、1985
- 6) 『自己学習力の育成と評価』緒川小学校、明治図書、1985
- 7) 『個性化教育へのアプローチ』緒川小学校、明治図書、1983
- 8) 『自己教育力を育てる授業づくり』加藤幸次、黎明書房、1988
- 9) 『個別化・個性化教育の第一歩』加藤幸次監修、黎明書房、1988
- 10) 『個性化教育の実践と評価 自己教育力の育成を求めた10年の歩み』卯の里小学校、黎明書房、1989
- 11) 『学習到達度に関する分析的研究』国立教育研究所紀要第118集、加藤幸次他、国立教育研究所、1990
- 12) 『小学校における個別化教育による学習能力の形成状況に関する調査研究』昭和63年度文部省科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告書、石坂和夫他、国立教育研究所、1989
- 13) 『自ら考え追求していく力をもつ子ども』、平成5年度上川教育研修センター研究協力校実践研究紀要、旭川市立東五条小学校、1993
- 14) 『適性に応じ自ら学ぶ学校生活の創造を求めて』緒川小学校研究紀要第5集、1986
- 15) 『子どもと教師が共に創るフレキシブルな学校を求めて』緒川小学校研究紀要第2集、第3集、1981
- 16) 『子どもと教師が共に創るフレキシブルな学校を求めて』緒川小学校研究紀要第2集、1980
- 17) 『教育方法の多様化にともなう学習集団の規模とその教育効果についての研究』平成元・2年度文部省科学研究補助金（総合研究A）研究成果報告書、加藤幸次他、1991
- 18) 『日本の小学生 国際比較でみる』第2版、千石保、飯長喜一郎、NHKブックス、1985